2015.5.124　聖霊降臨の主日

一人ひとりの上にとどまる

ヨハネによる福音 15:26-27、16:12-15

（そのとき、イエスは弟子たちに言われた。）

「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

　言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。父が持っておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

説教

みさなん、聖霊降臨おめでとうございます。

聖霊降臨はなにがおめでたいのか？ちょっとわかりずらいのですがふつうは教会の誕生の記念として聖霊降臨日を祝うのだと説明されます。聖霊が降る（くだる）ことで教会が生まれた、聖霊降臨日は教会の誕生日という解釈です。なんで聖霊が降臨すると教会が生まれるのか、イエスは受難を受け、三日目に復活して、地上に４０日間とどまり天に昇った、イエスはいなくなるが、その代わりに聖霊を送るという約束をしました。その聖霊が大々的に送られたのが五旬祭（ユダヤ教の祝日）の日だという証言が使徒言行録の二章

（きょうの第一朗読）に記されています。大々的におこなわれたので、この日を教会の誕生と解釈することで聖霊降臨は教会にとっておめでたい日となるわけです。

さて、きょうはヨハネの福音の15章のおしまいの方と16章の出だしをちょっと省いて12-15節を朗読しました。よくわからないと思います。前後の箇所や16章の出だし1-11節を読めばわかるかというとそうでもない。かえってわからなくなるくらいです。なるほど考えられた朗読配分だなと変に感心してしまいました。
きょうの福音を平たくいえば、イエス様が、イエス様をお遣わしになった方、父なる神のもとへ行くことによって、弟子たちに弁護者、つまり、真理の霊が送られてくるということです。
弁護者とか、真理の霊とか言われているものは聖霊です。弁護者＝真理の霊＝聖霊という図式で理解してください。
その真理の霊、聖霊が来るとどういうことが起こるのか。主イエスは、こう言われます。

しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。16:13

なぜ、真理の霊が、弟子たちにすべての真理を悟らせるのかというと、この霊は父から子に託されたことを受けて語るからです。霊は父なる神からイエス様に託されたことをすべて受け、またその言葉を聞いて、それをそのまま語るのです。自分から語るのではない、だからこそ真理なのだという逆説です。
またついでといってななんですが、「これから起こることをあなたがたに告げる」というのは聖霊が預言をするという意味ですが、とくにこれから起こ

ること＝終末を告げるということを意味しています。キリスト教の終末観、とくにヨハネ福音書の終末観はイエス様の誕生、受難、復活、昇天でいままでの世は終わってしまい、すでに新しい世が始まっているという終末思想です。
このあとの 14-15 節では三位一体について語られます。

語っていることがてんこ盛りでてごわい箇所だとおもいます。だからといってか、イエス様は語りだす前にこういいます。

言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。16:12

こういわれちゃうとしんどいのですが、真理の霊＝聖霊の導きを待つしかないなあとなってきます。聖霊の働き、そのほかに聖霊の照明という言い方もあります、聖霊によって照らし出される真理を受ける、聖霊の働きによって導いていただく、わたし達にはそれが要点になってくるのでしょう。聖霊降臨日＝教会の誕生日という図式で捉えるよりも、もっと個人的に自分自身を照らして、ひとり一人に注がれる聖霊を改めて考えてみる、振り返ってみるその記念としてきょうの主日を過ごしましょう。